

日本体育学会第64回大会
日本体育学会・全国大学体育連合共催シンポジウム
2013年8月29日、立命館大学

「仕事の間としての大学」

大学で働く体育・スポーツ人と日本体育学会

筑波大学体育系 阿江 通良

大学に勤務する体育・スポーツ人

- ①体育・スポーツ専門分野の教育者・研究者
- ②教養教育の体育・スポーツ教員(教育研究者)
- ③大学職員、コーチ、トレーナー等(課外活動担当)
- ④ ①～③の兼担者(教員)

人材としての体育・スポーツ人

- ①専門教育、教養教育を担当する人材(教育者)
- ②体育・スポーツ分野の研究を担当する人材(研究者)
- ③地域における体育・スポーツの指導者、拠点推進者
- ④競技スポーツの指導者・コーチ人材

大学は体育・スポーツの指導者人材の宝庫

キャリアからみた大学の体育・スポーツ人

- ① 学士 = 体育系 + 運動部 + 大学院(修士、博士) = 体育系
実技力(高度or専門: 1~2、一般: 体育教員) + 研究力
- ② 学士 = 非体育系 + 運動部 + 大学院 = 体育系
実技力(高度) + 研究力
- ③ 学士 = 体育系 + 運動部
実技力(高度or専門: 1~2、一般: 体育教員) + 研究力(自得的)
- ④ 学士 = 非体育系 + 大学院 = 体育系
実技力(高度or専門) + 研究力
- ⑤ 学士 = 非体育系 + 運動部
実技力(高度or専門) + 研究力(自得的)

今後、③、⑤は減少。②、④、①が増加し、
徐々に②、①に移行すると予想

体育・スポーツ人が獲得すべき基本的能力

「体育・スポーツ学分野における教育の質保証—参照基準と教育関連調査結果—」、
全国体育系大学長・学部長会、教育の質保証委員会、2011年10月

1) 専門職業人としての能力

- ① 身体運動やスポーツの実技力
- ② 指導力と事業運営力

2) 体育・スポーツ学の援用力

- ① 広範な知識と複眼的思考力
- ② マネジメント力
- ③ 危機管理能力
- ④ 言語および非言語コミュニケーション力
- ⑤ 観察学習力(自己研鑽力)

大学におけるより高度な体育・スポーツ人を目指すために

1. 大学人としての研鑽

キャリア①

実技力、研究力、指導力、マネジメント力の維持向上

キャリア②

専門外の実技力、体育・スポーツの専門知識力の向上
研究力、指導力、マネジメント力の維持向上

キャリア④

全般的な実技力、体育・スポーツの専門知識力の向上
研究力、指導力、マネジメント力の維持向上

→ 体育系学士課程への再入学(教員と学生の二重身分?)
所属大学内での研鑽

2. 学生の体育・スポーツ享受力を高めるために

日本学術会議からの提言「21世紀の教養と教養教育」にも示されたように、**保健体育の充実に努め、豊かな人間性をそなえた学生を育成**することは大学の責務の一つ

体育・スポーツリテラシー(Taiiku literacy) :

体育・スポーツがわかる、できる、
健康・スポーツ生活のデザイン能力
(**生活を体育的にデザインできる能力**)

(1) 真のLiberal artsの教育の実施:しかたを身につけさせる

教養教育は専門教育の基礎ではない。

方法(自分の身心の処し方)、ものの見方・考え方、態度

(2) 対象者の実態の把握

小・中・高で習得したものをさらに伸ばす
未習得のものに関する教育

ex. トレーニング法、身体技法、walking+jogging、
ゴルフ、テニスなど

障がい者への対応(Adapted sports専門領域)

学習指導要領に示された 体育及び保健体育の目標

小学校

「心と体を一体としてとらえ，適切な運動の経験と健康・安全についての理解を通して，**生涯にわたって運動に親しむ資質や能力の基礎を育てるとともに健康の保持増進と体力の向上を図り**，楽しく明るい生活を営む態度を育てる。」

中学校

「心と体を一体としてとらえ，運動や健康・安全についての理解と運動の合理的な実践を通して，**生涯にわたって運動に親しむ資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り**，明るく豊かな生活を営む態度を育てる。」

高等学校

「心と体を一体としてとらえ，健康・安全や運動についての理解と運動の合理的，計画的な実践を通して，**生涯にわたって豊かなスポーツライフを継続する資質や能力を育てるとともに健康の保持増進のための実践力の育成と体力の向上を図り**，明るく豊かで活力ある生活を営む態度を育てる。」

指導内容の体系化と領域

4-4-4の枠組み

		小学校			中学校		高等学校		
		1・2年	3・4年	5・6年	1・2年	3年	入学次 年次	次の 年次	それ 以降
運動領域		各種の運動の基礎を 培う時期			多くの領域の学習を 体験する時期		卒業後に少なくとも一つの運動 やスポーツを継続することが できるようにする時期		
A	体づくり運動	体づくり運動 ア体ほぐしの運動 イ多様な動きをつくる運動遊び		体づくり運動 ア体ほぐしの運動 イ体力を高める運動		体づくり運動 ア体ほぐしの運動 イ体力を高める運動			
B	器械運動	器械・器具を 使ったの運動 遊び	器械運動	器械運動	器械運動	器械運動	器械運動	器械運動	器械運動
C	陸上運動・競技	走・跳の 運動遊び	走・跳の運動	陸上運動	陸上競技	陸上競技	陸上競技	陸上競技	陸上競技
D	水泳	水遊び	浮く・泳ぐ運動	水泳	水泳	水泳	水泳	水泳	水泳
E	ボール運動・球技	ゲーム	ゲーム	ボール運動	球技	球技	球技	球技	球技
F	武道				武道	武道	武道	武道	武道
G	表現運動・ダンス	表現・リズム 遊び	表現運動	表現運動	ダンス	ダンス	ダンス	ダンス	ダンス
H	体育理論				体育理論	体育理論	体育理論	体育理論	体育理論
		保健領域			保健分野		科目保健		

高校科目体育の内容領域一覧

体づくり(各7-10時間)と体育理論(各6時間)は必修。

入学年度とその次の年次移行で履修条件が異なる

球技と武道の組み合わせ、器械、陸上、水泳、ダンスの組み合わせ

領域及び領域の内容	入学年次	その次の年次	それ以降の年次	内容の取扱い			
【A体づくり運動】	必修	必修	必修	ア, イ 必修 (各年次 7~10単位時間)			
ア 体ほぐしの運動							
イ 体力を高める運動							
【B器械運動】	B, C, D, G から ①以上選択	B, C, D, E, F, Gから ②以上選択	B, C, D, E, F, Gから ②以上選択	ア~エから選択			
ア マット運動							
イ 鉄棒運動							
ウ 平均台運動							
エ 跳び箱運動							
【C陸上競技】				B, C, D, G から ①以上選択	B, C, D, E, F, Gから ②以上選択	B, C, D, E, F, Gから ②以上選択	ア~ウに示す運動から 選択
ア 競争							
イ 跳躍							
ウ 投てき				B, C, D, E, F, Gから ②以上選択	B, C, D, E, F, Gから ②以上選択	B, C, D, E, F, Gから ②以上選択	ア~オから選択
【D水泳】							
ア クロール							
イ 平泳ぎ							
ウ 背泳ぎ							
エ バタフライ							
オ 複数の泳法で長く泳ぐ又はリレー	E, Fから ①以上選択	E, Fから ①以上選択	E, Fから ①以上選択	入学年次では, ア~ウから②選択 その次の年次以降では, ア~ウから選択			
【E球技】							
ア ゴール型							
イ ネット型	B, C, D, G から ①以上選択	B, C, D, E, F, Gから ②以上選択	B, C, D, E, F, Gから ②以上選択	ア又はイのいずれか 選択			
ウ ベースボール型							
【F武道】							
ア 柔道	B, C, D, G から ①以上選択	B, C, D, E, F, Gから ②以上選択	B, C, D, E, F, Gから ②以上選択	ア~ウから選択			
イ 剣道							
【Gダンス】							
ア 創作ダンス	B, C, D, G から ①以上選択	B, C, D, E, F, Gから ②以上選択	B, C, D, E, F, Gから ②以上選択	ア~ウから選択			
イ フォークダンス							
ウ 現代的なリズムのダンス							
【H体育理論】	必修	必修	必修	(1) 入学年次 (2) その次の年次 (3) それ以降の年次 (各年次 6単位時間以上)			
(1) スポーツの歴史, 文化的特性や現代のスポーツの特徴							
(2) 運動やスポーツの効果的な学習の仕方							
(3) 豊かなスポーツライフの設計の仕方							

球技は型ベースで内容提示

日本体育学会および大学体育連合は何をすべきか(その1)

1. 体育・スポーツ関連の学会参加、研究発表の促進

例: **教員評価・昇任基準の再検討**

体育学研究・IJSHSへの掲載論文(1本)

+ 研究発表(3~5件)

2. 専門領域における新しい知見・情報を発信

例: **専門領域からの解説・review集**

→ 学会ホームページ(年1~2回程度)

3. **実技などの講習会**の開催

キャリア別、種目別など

シニア会員
(定年退職者)の再登板

```
graph TD; A[シニア会員 (定年退職者)の再登板] --> B[2. 専門領域における新しい知見・情報を発信]; A --> C[3. 実技などの講習会の開催];
```

日本体育学会および大学体育連合は何をすべきか(その2)

4. 複数大学による大学体育(連携大学体育)の推進

教育の質保証と単位の互換性

施設、人材、プログラムの連携・共同利用(融通)

定時と集中の組み合わせ

例: 京都三大学教養教育研究・推進機構方式

体育・スポーツ版の「エラスムス・ムンドゥス」

5. 体育・スポーツ指導者検定制度の確立

日本体育学会、全国体育系大学、大学体育連合による
共同検定(準国家試験的)

6. 大学体育研究の推進

例: 博士(大学体育学)

筑波大学・鹿屋体育大学の共同専攻
(学位プログラム、2016年から)